

神戸大学第一次カラコルム遠征隊

報 告 書

—— シェルピ・カンリ (Sherpi Kangri 7380 m) ——

The Kobe University
Mountaineering Expedition

to

The Karakorum

1974

神 戸 大 学 山 岳 部

神 戸 大 学 山 岳 会

The Alpine Club of Kobe University

御 あ い さ つ

神戸大学第一次カラコルム隊の派遣にあたりましては、法入関係、大学、山岳部OBなど各方面から多大の御援助をいただき、まことに有難うございました。

神戸大学山岳部および山岳会は、戦後だけでも南米のパタゴニア、ボリビア、アンデス、さらにカナダのユーコン等に多くの遠征隊を送り出しましたが、数年前よりヒマラヤを目ざして研究調査とトレーニングに励んできました。そしてカラコルム山系を候補に選びました。幸にも今年4月、ようやくカラコルムのシエルピ・カンリ峰の登行が認められ、ようやく6月中旬出発することができましたのも、各方面からの御支援の賜です。

しかし、残念ながら7380メートルの頂上に足跡をとどめることはできませんでしたが、6300メートルの稜線に達し、氷河でとりかこまれた前人未踏の尖峰の全貌をつかむとともに、登頂の可能性を確かめ、気象、地形、風土など数多くの資料を集めることができました。カラコルム委員会では、この第一次隊の貴重な経験を生かし、資料を慎重に検討して、できるかぎり近い将来に登頂に成功すべく、第二次隊を派遣すべく目下着々とその計画を進めております。

ここに第一次隊の行動概要を報告するとともに、御援助をいただきましたことに厚くお礼申上ります。また、第二次隊についてもよろしく願ひいたします。

神戸大学カラコルム遠征委員会

委員長 西村 勝比古

1. 隊の構成 (Members of the Expedition)

- 隊長 田中俊甫 35 (Leader Toshiho Tanaka)
神戸大学教育学部卒 西宮市鳴尾東小学校勤務 神戸大学山岳会会員
1969年 台湾登山
1971年 東神戸高校スワットヒマラヤ踏査隊隊員
1972年 神戸大学アラスカ登山隊隊員
- 副隊長 井上達男 27 (Sub-Leader Tatsuo Inoue)
神戸大学工学部卒 大福機工(株)勤務 神戸大学山岳会会員
1968年 神戸大学カナダニューコン学術登山隊隊員
- 隊員 河本卓生 30 (Manager Takuo Kawamoto)
神戸大学法学部卒 宝塚化成(株)勤務 神戸大学山岳会会員
- 八田義一 31 (Yoshikazu Hatta)
神戸大学文学部卒 同修士課程修了 神戸山手女子短期大学勤務 神戸大学山岳
会会員
- 西内 博 24 (Hiroshi Nishiuchi)
神戸大学経済学部卒 日立化成工業(株)勤務 神戸大学山岳会会員
- 山口幸久 25 (Yukihisa Yamaguchi)
神戸大学工学部在学中 神戸大学山岳部部員
- 酒井利直 24 (Toshinao Sakai)
神戸大学経営学部在学中 神戸大学山岳部部員
1972年 神戸大学アラスカ登山隊隊員
- 医師 船津 登 29 (Doctor Noboru Funatsu)
大阪医科大学卒 同大学付属病院勤務 神戸大学山岳会会員

2. 目的

カラコルム山脈東部サルトロ山群中の未踏峰シェルピカンリ (7380m) の登山と、
同地域における学術調査

3. 遠征隊の行動概要

- 6月15日 先発隊 (井上副隊長 山口) 羽田発 P.I.A. (Departure from Tokyo
Two memberg)
- 16 " カラチ着
- 19 " ラワルピンディ着 アナカン通関
- 20 " 旅行省大臣と会見 (Meeting with Minister of Tourism D.)
- 22 本隊 (田中隊長以下6名) 羽田発 P.I.A. (Depuntur from Tokyo)

- 6月23日 本隊 ラワルピンディ着 (Arrival at Rawalpindi)
- 24 遠征隊 ブリーフィング (Briefing of the Expedition)
- 28 全装備と共に全員トラックにてラワルピンディ出発 (Departure from Rawalpindi)
- 30 ジャグロート着 (Jaglote)
- 7月 1日 一部ジープにてスカルドへ出発 (金なくす)
- 3 一部スカルド着 残りジャグロート発 (Arrival at Skardu)
- 4 全員カパルー着 (Arrival at khaplu)
- 6 キャラバン出発 ウルサ泊 (サリンの対岸) (Departure for Caravan)
- 7 ウルサーハルディータガーストルディ泊
- 8 トルディーブラコール泊
- 9 ブラコール ーラシット ーチョガグロン ーカルマディン泊
- 10 カルマディン ーコルコンダス泊 (初めて Sherpi kangriを見る)
- 11 T.B.C 3850m着 Sherpi Gang GL 本流左岸偵察 (Establishment of Tempolary Base Camp 3850m)
- 13 ドンドンリッジ越ルート偵察
- 14 ドンドンリッジ越上部ルート偵察 右岸ガリー偵察
- 17 B.C建設 (Establishment of Base Camp 4300m)
- 19 第3支水河 (西水河) 偵察
- 21 C₁ 建設 (Establishment of Camp 1 4850m)
- 28 C₂ 建設 (" " Camp 2 5250m)
- 30 C₂ 移設
- 8月 2日 第4 ice fall 突破
- 6 C₃ 建設 (Establishment of Camp 3 5750m)
- 11 C₄ 地点到達 最高々度 6300m (快晴高度計高度)
- 14 C₃ 撤収
- 18 C₂ 撤収
- 20 C₁ 撤収
- 21 B.C撤収 (Departure from Base Camp)
- 26 カパルー帰着 (Arrival at khaplu)
- 29 スカルド着 (" " Skardu)
- 9月 3日 ラワルピンディ着 (Arrival at Rawalpindi)
- 9 ラワルピンディ発
- 27 最終パーティ Pakistan 離
- 28 全員日本へ帰国 (Arrival in Tokyo)

『コルコンダスの女王“シェレ・ガンリ”に登路を求めて』

。 出発まで

カラコルムの未踏峰、シェルピ、カンリの登山申請を続けて三年目、今春は、印パ紛争も収まり、あるいは許可が来るのではないかと、心待ちにしていた。しかし、四月下旬になってもパキスタン政府からは何の音信もなく、イライラしながら五月連休を迎えようとしていた。そして、五月三日になってようやく正式許可を入手したため出発を一ヶ月後に控えて不可能とも思える準備を始めた。

遠征委員会が開かれ、神戸大学として今後カラコルムでの一連の遠征及び学術調査が展開される事を前程として、我々の隊を第一次隊として派遣すべき事が決定され、隊員選考資金計画等が始められた。

装備、食料の調達、関係書類の作成と、昼夜を問わず厳しい日程に、現地で疲れが出るのではないかと心配されたが、六月十五日の先発隊出発の目標のもと、隊員一同はもとより、関係各方面の方々にも、実に無理な注文を発し続けたにもかかわらず、暖かい御支援が得られ、すでに決定されたシェルピ遠征のプロジェクトに進捗する事ができた。

カラコルム遠征に医師の同行は必要不可欠な条件であり、最後まで参加願える方が見付からず苦労した次第であるが幸いにして、五月も中旬になって船津ドクターの参加が決った。

六月十日、約1500キロの荷物をトラックへ積み込みやっとな出発できるという実感を得る事ができた。出発までの準備期間が短かったため、輸送はすべて、空輸とせざるを得ず、インフレーションの影響に重ねて予算は止まる事を知らずふくれ上ってしまった。

六月十五日、パキスタン航空機で、井上、山口の二名が先発、富士を右手に見て、一路カラチへ向った。一週間後の二十二日、本隊田中隊長以下六名、多数の方々に見送られて第一次カラコルム遠征隊は、幸先の良いスタートを切った。

。 パンジャブのオアシス“ラワルピンディ”にて

カラチは、砂漠に囲まれて、初めて経験する熱帯地方の暑さと、強烈な茶色の世界に思わず緊張してしまうのにたびたび気付いた。

パキスタンの主都イスラマバードは、ラワルピンディの北方に隣接した緑の丘陵地にある新しい計画都市である。都市の機能はほとんどラワルピンディがはたしており、ここには国会議事堂等の公官庁が目につくだけの、静かな街だった。ラワルピンディのメインストリート、マリーロードのバルクホテルに陣取った我々は、スカルドへ出発するまで、イスラマバードへ毎日、タクシーで往復したものだ。ピンディには大きなバザールが三つあり“マイフレンド”と我々に人なつっこく集ってくる陽気なパンジャブ達の活気ある、いわば、ふだん着の町といった印象であっ

た。

さて、カラチに着いた先発隊は、兼松江商カラチ支店に挨拶に向き、所長であられる檜皮さんから、パキスタン初見参である我々に、日本と全く文化の異なるイスラムの世界について貴重なアドバイスを賜わり、又、日本の遠征隊本部との連絡にテレックスを使用させていただく点についてもお願いし、さっそく、本部との連絡を取った。今遠征の隊員達は若く、それ由に家族の心配もいっそう大きいものがあったと思われるが、テレックスによるタイムリーな情報交換は、実にありがたいものであった。

カラチでの仕事は他にプロパンガスの通関手続があったが、約束の十六日にまだ着いておらず、十八日まで頑張ったが、そこはパキスタンペース、ピンディでの山積の仕事を前にゆっくりしておれず、この件は通関業者の、ユーソフ氏に委託し、十九日、静岡隊の隊長秋山氏と共にラウルピンディへ移った。氏の紹介でNIPA, SPECIALISTS SERVICESのアキール氏を知った。彼は、日本の大学を卒業し、パキスタンの発展を真剣に願っている方で、もちろん日本との交友も重要な関心事であり、我々の遠征についても、進んで協力したい旨で、ジャベット君という彼のプロジェクトの一員をピンディへ同行させてくれた。我々の遠征隊は、ジャベット君の助けを得て、パキスタンの正確な内情を知る事ができ、わずらわしくも楽しい、旅行省等、パキスタン政府との交渉を実にスムーズに展開する事ができた。

ピンディの空港には、旅行省の役人が出迎えてくれ、さっそく通関の便宜を計ってくれその日のうちに、56個の荷物をパルクホテルへ引き取る事ができた。

二十一日、ジャベット君のアレンジで、旅行省(MINISTRY OF MINORITIES AFFAIRS & TOURISM)大臣、ロイ氏(RAJA TRIDIV ROY)との会見が実現し、静岡隊の一行と、パキスタン国会の大臣室で、日本とパキスタンの交友に関する話合いが一時間近く持たれ、氏は特に、彼が仏教徒である事もあって、仏教徒の国、日本の経済発展とアジアのリーダーシップについて強い関心を示された。我々は、登山家の立場から、遠征のあり方と、我々の希望について提案した。我々の提案は取入れられ、パキスタンにおける登山は年々、快適なものになっていくものと信じている。

二十三日、カラチへ到着した本隊は、出発前の疲れを取るため、二、三日休養を取るつもりでいたが、先発隊のお膳立ての良さがわざわいし、仮眠の暇もなく、ラウルピンディへ呼び出され、夕方全員がパルクホテルに集結した。

二十四日は、いよいよ隊長と副隊長が旅行省の担当官の所へ出頭し、連絡将校、マムーン中尉を派遣されて、パキスタン内での遠征活動がスタートした。装備係は、チャパティ焼の鉄板から、石油ストーブ、ランプ、カバブ焼の串等手配のために、又食料係は、アタ、ギー、紅茶、米、砂糖の購入許可書をもって、暑い太陽の照りつけるバザールへ出て行った。石油不足は深刻で、約250リットルの灯油もあちこちのスタンドを廻らねば入手できなかった。パキスタン地理局で目的地の地図を借用するためには、旅行省で許可書をもらい、それを持って軍の指令部へ申請書を出し、そこで許可書をもって……と、まあ一つの仕事をするのに何とも廻りくどい点は、

いずとも同じといったところであった。ドルの換金、各種保険、ラジオのインタビュー、連絡将校の装備購入と、全員ばたばたと掛け廻り、ろくろく食事もできない二、三日は、出発前を再現し、それに言葉の障害も加わって、てんやわんやであった。汗も乾ききってしまう暑さの中で、マイフレンド君達と飲むマンゴージュースの味、月明りの中をタンガー（馬車）にゆられて帰る道すがら、チャドリの貴婦人の姿をすれ違いうタンガーに見る。アショカの王朝からイスラムの伝統を継承した永遠の文化にふれた一瞬であった。

○ 大河インダスにそって

ベースキャンプは六月下旬に、そして登頂は八月月上旬までに、と考えていた我々は、出発が一月近く遅れ、ピンディへ集結した時点ですでに二十日を過ぎていたため、できる限り早く山中へ入る事が望まれた。ピンディからスカルドへは空路、スカルドからカバルをジープでという計画であったが、天候の悪化で乗客と荷物が滞荷し、加えて、各国からの遠征隊が本年の解禁に殺到し、空路ではいつまで待たされるかわからない状況にあった。幸い、中国の援助で完成した、インダス川ぞいのトラック道路が、週に二、三日オープンされる事を知り、陸路スカルドへ入る事に決定し、六月二十八日、ポーター達の食料を含めて、約2500キロの荷物といっしょに、トラックへ乗り、一路スカルドへ向った。

ルートは、ピンディからベジャワール街道へ入り途中から、マリー、ミンゴラ等とならぶ避暑地、アブタバートを通して、1600メートルの峠を越し、海拔570メートルのインダス中流へ出て、あとは、インダスぞいに、急な山肌に作られた、半分トンネルの様な険しい道を進み、ギルギットへの別れ道、ジャグロートでジープへ乗りかえて、さらに険しいジグザグでアップダウンの激しいジープロードをスカルドへ出る、約四日の計画であった。

ピンディ出発の朝、暑さと、食事の合わなかったせいか、まず西内が高熱と嘔吐でたおれてしまったが、出発せざるを得なかった。トラックの荷台の上にアタの袋を使ってベッドを作ったりして、四十度を越す熱風の吹くピンディの街を出発した。水をいくら飲んでも喉の乾きをいやす事のできない暑さは、病人にとっては実につらいものだったろう。

1300メートルのアブタバードには午後三時頃着いたが、とても涼しく、ここでモナリザ、レストランというのに入って、ローストチキンと、パンの遅い昼食をとった。思えばこれが、最後のまともな食事で、ベースキャンプへ入るまで、すべて現地食で通す事となった。アブタバードはヒマラヤ杉、松等の針葉樹もある緑の美しい高原であった。カラチもピンディも砂漠の中にあり、厳しい自然を感じたが、ここは上高地を思い出すほどに心の休まる良い所だった。インダス川へ下る峠の手前で車を止め、畑のそばで寝たが、羽毛のシコラフがちょうど心地良いほどの涼しさだった。この高原地帯は雨が降るので、水田も発達していた。涼しさが幸いし西内の調子も一気に回復した。

翌二十九日は、どんどん高度を下げて、朝八時インダス川へ出た。灰色の奔流が二、三百メートルから五百メートルほどの谷底一ぱいに流れ、水音も力強く、不気味なほどに早く流れている。

再び暑さが帰って来て、逆登るにつれて、緑が無くなり、やがて、灰色と茶色のガレキの谷と山になり、二、三時間ごとに現れるオアシス以外は全く、荒涼とした風景が展開する。道は五百メートルもの断崖につけられ、はるか谷の底に灰色の水が流れ、頭上には、垂壁が屏風となって連なり、カラコルムの入口にふさわしく強烈な自然を醸し出していた。やがてそのゴルジュ帯も過ぎ谷は開けて中央アジア的な風景となるころ雲の全く無い空のかなたに、ナンガパルバットの姿が見えた。

焦熱地獄の様な熱風と太陽の直射にいささかぐったりした頃に着く、オアシスでの休息、チャイハナの柔焼のつぼの水と、チャイは何にもまして、うれしいものだった。時にはインダスの泥水も飲まねばならず、つらいアプローチではあったが……。

ジャグロートでは、ジープの手配がうまく行かず苦勞したが、三日ほどかけてラストのパーティが出発できた。今度は、八田が西内と同じ症状になり、二日ほどチャイハナでたおれていた。このオアシスから見る裸の山、ナンガ、パルバットは大きい。八千メートル峰にふさわしく空のかなたにそびえ立って見える。前面に何の障害物もないため、実に、7000メートルの比高で一気に頂上まで続く斜面が目の前にあるのだから、とても30キロも先にある山とは思えなかった。つらいトラックとジープのアプローチも、時おり姿を見せるカラコルムの巨峰達には多少は慰さめられた。

七月三日、七台目のジープに乗った最後のパーティは、スカルドへ出発した。スカルドでは、別に用もなく、ジープの乗継ぎのためレストハウスに入ったが、再び七台のジープをチャーターして、カバルへ出発した。

七月四日、満月が冴えるジョーク河ぞいにカバルへ入りした。スカルドを出て二時間ほどで、インダス川の本流と別れ、ジョーク川へ入る。川は今までと少しも変らぬ大きさに、計り知れないインダスの大きさに驚かされた。

○ キャラバン

カバル計は、高度2400メートルにありスカルドよりも緑が多く、住民の生活も豊かな様だ。レストハウスに荷物を入れ、五日の朝からハイポーター、ポーターの雇用と、荷物の仕訳を始めた。

レストハウスの前庭に、バラサーブに副隊長、ドクターそして連絡将校が、面接所を作り、ハイポーターの採用試験を始めた。連絡将校のマムーン君は、何でも自分で処理したがる男で、ハイポーターの採用にも、まるで自分の召使いを雇うようつもりでいるらしかった。そこで我々の気に入らないやつらは、健康診断で篩いにかける事にした。スカルドからは、サトバラのハイポーター4名が我々といっしょにカバルへやってきたが、決定はあくまでも隊長が決める事とし、アイゼンは使えるのか、経験はあるのかといった点、チェックし、7名のハイポーターを採用した。オラム・モハマッド、モハマッド、フセイン、ジャクール、アサッド、の4名のサトバラ組に、サリーンのイブラヒム、カンデのママチョ、それにコック長としてカバルのフセイン

が決った。さらにアシスタント・コックにサリーンのモハマッド・アリと、メイルランナーのサラームが加えて採用された。

一方、ローポーターの方は、ポーター頭マディに一任し、あちこちの村からやってきた200名近いバルティ人達の中から荷物の数だけ、93名が選ばれ番号札が渡された。奥地の人々にとっては遠征隊のポーターは実に割の良い現金収入の道なのが、採用された者の明るい笑顔と、あぶれた者の渋い顔は対象的であった。

七月六日、キャラバンの出発。フランスの雑誌記者夫妻に見送られ、ザークの渡しから始った。幸いショーク川の水量が少く、一往復20分程度であったので、112名がショークの対岸へ渡るのに5時間たらずで終った。いよいよ今日からは自分の足だけがたよりの世界へ入ったわけだ。サリーンでは広場でポーターに与える食料を分配し、フーシェ谷を今度は渡渉して、ウルサへ向った。112名が一列になって進むキャラバンの光景も、雄大なカラコルムの前山の風景にちっほけな蟻の行列のごとく見えた。ウルサへの渡渉の頃夕暮迫り、谷は影に入り、フーシェ谷の奥にマッシュェブルムの巨大な岩峰が黄金色に輝き、はるかなるカラコルムへやってきた感激を味わう事ができた。

七月七日、再び調子をくずした八田と看病のためにドクターを残し、出発。ショークとサルトロの分水嶺の鼻先を廻って橋をわたりハルディのオアシスへ、ハルディからは、タガスまで、日中の最も暑い時に、砂漠地帯を歩く事になった。ヒタはトルディで迎えた。

七月八日は、ブラコールまで進んで、遅れた八田、ドクターを待つ。どこかでとらえた雪豹を村人がつれてきた。生後2ヶ月程のメスであった。連絡将校がベースキャンプで飼うと買って貰い券で名前をレイ子とつけた。「山猫やないか」「いや雪豹だでや」「ノー、マウンティンライオン」と、にわか動物学者が分類を始めたが、結論は出ず。名前の方は、ドクターの診断でメスと分ったので、山口隊員の彼女の名をつける事で衆議一決。野生動物を飼う事は、専門の動物園でも実に困難な事であり、ましてや、子供であれば、ベースキャンプでは必ず死んでしまうから、つれて行くのはやめろと忠告したが、マムーン君は聞き入れなかった。案の条、ベースで二週間後に死んでしまった。チャラガベースのモレーンにレイ子の墓が作られた。

七月九日、キャラバンは快調に、ゴルコンダス谷の出合、カルマディンへ着いた。サルトロカソリ、チョゴリザ、リンクサール等の7000メートル峰がそれぞれの谷の奥に望まれた。花崗岩の岩峰、ダンサムピークの奇怪な頂上もすぐそこにある。シェルピ、カンリの姿を一日も早く見たいと心がさわく。

七月十日、カルマディンを朝早く出発し、ゴルコンダス谷を登る。この谷の入口は狭く、兩岸は、花崗岩が垂壁を作り、特に左手のシェルピガンリッジの末端ピークは、一気に500メートル以上も切れた一枚岩の岩塔になっている。このピークを廻り込むとゴルコンダスの村へ出る。谷は開けて、シェルピ、ガン氷河が黒々と横たわり、アイスフォールの奥に、女王、シェルピ、カンリの白い姿が見えた。

「ウダル マウンテン ナーム キマ ハイ？」 バルディ人でウルドウの解るポーターにシ

ェルビの名前を聞いてみた。「シェレ・ガンリ」明快な答が返ってきた。バルティ語で「巨大な氷」の意味だと考えられる。彼等は、村の奥の谷にある大きな氷河と、その奥の山を区別して考える事はないわけて、どちらも、「サーブ、でっかい氷でさあ。」と答えたに過ぎないであろう。コルコンダスの村は茶色の花崗岩の岩壁に囲まれていて、頂上だけ見えるサルトロカンリも黒々とした岩肌が出ているので、シェレ・ガンリと言えば、他の山と区別がつくのであろう。

さてキャラバンは、コルコンダスの村の水源になっている大きな滝の下でキャンプする事となった。キャンプには、シェルビ・カンリを眺めるに絶好の岩があり、その上で何時間も頂上あたりのルートを捜す。ドンドン氷河の合流するあたりに大きな氷瀑があり、その落口は狭くなって、氷河の奥は全く見当がつかない。そこで、井上とママチョ、イブラヒムが偵察に出る事になった。

翌十一日、キャラバンは、シェルビ・ガン氷河左岸にルートを取り、第一アイスフォールの下部、ドンドン氷河とリカ氷河の間のリッジ末端の丘に仮ベースキャンプを設営した。

キャラバンは、ハイポーター達の献身的な活躍と、ポーター頭マディの温厚な人柄の成せるところか。何一つトラブルもなく快調なペースで進んだ。仮ベースで三十名を残して帰ってゆくポーター達との別れはまるで旧知の親友達との惜別の感があった。

再びベースキャンプへ一ヶ月半後に集った顔の中に多く、往路のポーター達が含まれていて、隊員達は喜んだものだった。

○ 未知のシェルビガン氷河の中で

昨今、ネパールヒマラヤを含め数多くの遠征隊が派遣され、日本ではその貴重な体験の資料が簡単に入手でき、ますます遠征隊の数も増加する事は想像にかたくない。必然的に未踏峰の数も少くなり、登られた山の隣の山か、すでに登られた山のバリエーション、ルートが遠征隊の対象となってきた。いわば、計算しつくされた登山、情報化時代にふさわしく資料に基づいた登山が、高度の技術力と現代機械文明の利器に支えられて開花している。登頂の確率も高くなってきたわけである。ヒマラヤの地図の上に情報の密度分布をプロットしそれをもとに登山対象を選択してゆけば、我々は、その空白部を選ぶ。カラコルムへの夢はやはり未知な部分が多くあるから持てたものであろう。シェルビ、カンリは、カラコルム東部でもはっきりした姿もとらえられておらず、我々が選んだ山として、十分魅力のあるものだった。

今その山を目の前にして、ルートを求めようとしている。柱状節理が鉛直に走った大岩壁の屏風と、大地震のあった跡の様な氷瀑を前にして、前途多難な登山となった現実に厳しさを感じながら見上げている。ベースキャンプは、少なくとも4500メートル以上に設営したいと考えていたので、何としてもポーター達の通れるルートをみつけなければならなかった。

アイスフォール左岸のサイドモレーン伝いのルート、ドンドンリッジ上の6400メートルの岩峰、ドンドンピークの前後のコル越えのルート、それに氷河右岸のアイスフォールの成因となっているシェルビ、ガンリリッジの支稜越えのルートを偵察した。ドンドンリッジの5080メートルの小さなコルへ達したパーティと氷河右岸のアブレーションバレーから急なガリーを800

メートルつめて、チョンギというコルへ達したパーティによって、チョンギ越えのルートを取れば、上部シェルピ、ガン氷河の前人未踏の内院へ入れる事がわかった。この偵察に4日間を費し、七月十五日、まず第一パーティの山口、酒井と待期していた30名のポーター達がベースキャンプ建設に向った。

仮ベースを出発し、リガ氷河の出合まで下って氷河に移り、オーギブの波ぞいに対岸へ出る。対岸のアブレーションバレーからガリーに取付くが、急で岩雪崩の危険性がつきまとう。チョンギ(コル)まで高差800メートル、途中で岩間から水の出ている良い休み場があり、そこから上部は、一枝岩の傾斜のあるスラブを簡単な岩登りが二時間以上続く。コルからの下りは高差300メートルほどで、氷河本流の第一アイスフォール落口のアブレーションバレーに出る。水が流れ、高山植物の咲き乱れた美しい所だ。すぐに、シェルピ、ガンリッジ側から(氷河右岸から)小さな支氷河が合流してくる。これを越して、その奥の岩稜の基部が我々のベースキャンプとなった。ポーター達は、夕方疲れ切って、仮ベースへ帰ってきた。カパーからやってきたポーター達の中には高山病でたおれる者もあった。こうして三日間かけ、七月十七日全員ベースキャンプへ入る事ができた。

ベース建設中に、山口、酒井はさらに氷河の奥を偵察した。ベースからすぐに第二アイスフォールが始まり、その上に、左手から三つの支氷河が一つになって合流してくる。その内の一つは、本流とほとんど同じ大きさがあり、本流と同様、第3アイスフォールとなって行手を阻んでいる。二人は、本流と支流のコンタクトラインぞいに第3アイスフォールの基部まで偵察してきた。

ベース建設の祝いもそこそこに、七月十九日から上部の偵察が再開された。井上、西内で、シェルピ、カンリの西稜に取付くルートを探めて、第4支氷河を登っていった。他の隊員達は、ベースキャンプ上の岩稜の台地を越えて、80メートルの急なルンゼにフィックスロープを張り、第2アイスフォール上の支氷河の合流点にデボをくり廻した。高度順化の進まぬ隊員達をしり目に、ハイポーター達は元気にデボ作りをしていた。台地からの荷物の下降には、ケーブルが使用され、三日間で上部キャンプで必要なすべての装備と食料のデボが作られた。

第4支氷河(西氷河)の偵察は不首尾に終わった。西氷河のアイスフォールを真中から登りつめ、5000メートルのプラトールに出た二人は、西氷河が北へ廻り込んだ地点まで進んで、シェルピ、カンリの西稜を真正面に見たが、西稜は、カペリ氷河へ落ちて、西氷河の源頭は、シェルピのジャンダルム群に突き上げており、西稜へは取付けない事が解った。例え取付いたとしても、氷壁とナイフエッジに加えて三つの岩壁と鋸状の頂稜に阻まれ、実に困難なルートである事が予測できた。

予定した三つのルートの内、西稜は否となり、我々はルートをシェルピ、ガン氷河本流に求めて、南稜か、東峰とのコルから東稜をルートに取る事にした。この内南稜は、幅広い雪の斜面から鋸状の岩稜となり、7000メートルあたりから5200メートルの氷河内院の第4アイスフォールの基部まで、70度を越す、幅の狭い岩壁となって一気に2000メートル近くも切れ落ちている事が第一キャンプに到達した時点で判明し、結局サルトロ、ゲントの主稜へ氷河をどこ

までもつめて行くルート以外に道はない事になり、そこへ向けてキャンプを進める事となった。

七月二十一日、氷河本流の第3アイスフォール落口の右岸、モレーン丘の上に、第一キャンプが建設され、田中隊長、八田、酒井の3名が入った。第二キャンプは、第一キャンプから氷河が90度向きを変え主稜線から、四つのアイスフォールが集ってくる内院の、シェルビ南稜と、主稜線上の6350メートル、ピークの間から落ちてくる第4アイスフォールの直下に建設された。第二キャンプへ到達して、シェルビ、ガン氷河のほぼ全容が明らかとなり、未知のペールは剥された。第一キャンプ建設後天候が悪化し毎日雪が降り、第二キャンプへ井上、八田、山口が入ったのは七月二十八日であった。この時は、本峰と、ジャングルムの間から流れ入っている氷河の出合の少し下にキャンプを設営したが、第4アイスフォールにルートを取る事にしたので七月三十日、移動させた。

第4アイスフォールは、シェルビ、ガン氷河の四つの源頭の内の最も状態の悪いものにルートを取る事になったが、突破に四日間のルート工作中に約900メートルのフィックスロープと二ヶ所のアイスチムニーには、縄梯子を使用した。巨大なアイスビルディングやクレバスの崩壊が絶えず起る危険なルートであった。新雪の後は深いラッセルに苦労した。

このアイスフォールを貫けると、シェルビ・カンリ本峰、東峰それに6350メートルのピラミッド・ピークに囲まれた広い氷原に出た。高度5700メートルほどで、北に、幅1キロメートルほどの大きな峠が、東峰と主稜線から派生した6300メートルほどの岩峰の間にあり、そこからは、P36氷河へゆるやかな斜面が下っていた。我々はこの峠をシェルビ・ラと名付け、コルの手前に第三キャンプを建設する事にした。

本峰の北側へ廻り込んだわけであるが、最後の残されたルート、本峰と東峰のコルへ出るルートは、このシェルビ・ラの氷原を本峰南稜と、東峰南稜及び、二つのピークを結ぶ吊尾根が作り出す巨大なカール壁が、すべて懸垂氷河が掛っていて、本峰寄りの唯一の雪の斜面も頂上からのブロック崩壊と、カール全体の雪崩のため近づく事ができなかった。

東峰南稜は、カール側が垂直な花崗岩の壁となったシャープな雪稜で、シェルビ・ラへ続いていた。本峰へのルートを断られた我々は、東峰の登頂に全力を尽す事にした。

。 登頂断念

八月六日、井上、八田、山口、西内の四名が、第3キャンプへ入り、東峰南稜のルート作業を始めた。6050メートルの第一岩峰までは、下部は広い雪の斜面で、5900メートルからは、60度程の岩混りの雪壁であった。フィックスロープ200メートルで、第一岩峰の先の小さなコルに達する。第一岩峰から第二岩峰へは、雪庇の張り出した療せ尾根となる。500メートルのロープを固定して第二岩峰へ到達する。第二岩峰からは、少し下りとなって、広い台地に到る。さらに200メートルのロープを使用した。

第二岩峰は良い展望台であった。中国の国境上のシンギ、カンリ、テラム、カンリ、アブサラサス、リモ山群、マンモストン、カンリ、が立ち並ぶ。近くにはサルトロ・カンリが壮大な姿を

見せている。シェルピ・カンリの本峰も指呼の間にある。東峰南稜の台地までルートを伸すのに五日間を要し、荷上げたロープもすっかり使い尽してしまった。

八月十日、田中隊長、酒井が第3キャンプへ入り、東峰アタックの可能性について検討した。南稜台地、6250メートルに第4キャンプを建設するのにあと二日の荷上げが必要であった。第4キャンプから上のルートは尾根の幅は広がるが、傾斜は今までも増してきつくなり、頂冠部へ続く最後の300メートルほどは、アイスブロックが重なり合って、氷のオーバーハングを形作っていた。さらに500メートル程の固定ロープと、一週間程のルート工作が必要と考えられた。仮ベース建設から一ヶ月、休みなくルートを求めてきた我々は、頂上へのアタックを前に一旦、下部キャンプへ引き返し、休養と上部キャンプの再補強をするべき時であった。頂上アタックを強行する以外、もし引き下るとしたら、すでに残り日数もなく、補強する間もなく、食料も尽きてしまい事は明白であった。東峰の頂上を前にして、登頂を断念する事は実につらい事であった。田中隊長の決定を待つ事にした。夕暮のシェルピ・ラの第三キャンプで長い議論の後、登頂断念が決定された。

八月十三日、八田、酒井の二名はシェルピ・ラをP36水河側へ下り、初のシェルピ・ラ越えをはたした。一方、船津ドクター、西内のパーティは、第二キャンプから、ジャングルムのコルへ登り、本峰西稜への取付の可能性を探った。十四日、天候が悪化し、吹雪の中、第三キャンプの撤収を強行した。すでに食料も少く、第二キャンプへ逆に第四キャンプ用の食料を下すといった状況であった。

第四アイスフォールの機材の撤収と、高所医学の実験のため三日間第二キャンプに滞在した後、八月十八日第一キャンプへ下った。

第一キャンプでは、平板測量のため、ジャングルムの支稜上、5280メートルのピークに登り方位を取った。ここは、シェルピ・ガン水河のすべての支流を見る事ができ、地図の作成に役立った。

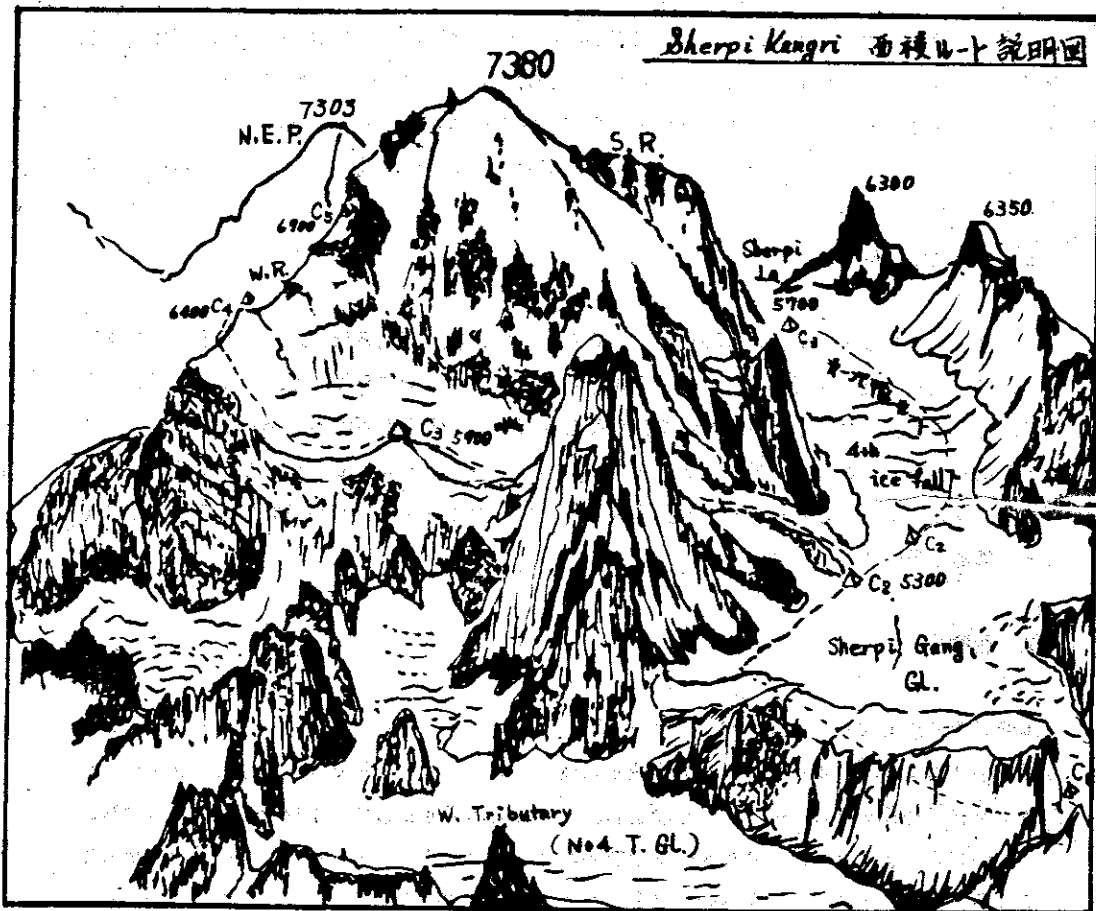
八月二十日、全員ベースキャンプへ帰り、夜は、キャンプファイヤーを囲んで、ハイポーターと連絡将校を加え、たった一本残ったウイスキーを空にして、羊のバーベキューをさかんに、夜遅くまで、日バ歌合戦を続けた。

八月二十一日、ホームシックの連絡将校を先頭に帰路のキャラバンに入った。フーシェ谷の渡渉は、増水のため、不可能だったのでカネまで逆登って、橋を渡り、サリーンへそして再びザークに乗って、二十六日、カパルーへ帰ってきた。

(井上記)

『シェルピ・カンリの登路と登頂の可能性』

我々、第一次隊の活動により、シェルピ・ガン水河の全貌が明らかとなった。ロングスタッフの東部カラコルムの探検時代から、サルトロ山群を越えて、シアチェン水河系へ入る事のできる



ルートは、ピラフォンド氷河からピラフォンド・ラ越えのものと、カベリ氷河から、シア・ラ越えをする二つだけであるとされていた。我々がシェルピ・ラを発見し、これを越してP36氷河へ足を踏み入れた事は、第一次隊の一つの成果と考えられる。

シェルピ・ガン氷河の地図は、1912年のワークマン夫妻の遠征隊のピターキン作図のものが唯一であるが、この地図には、シェルピ・カンリは、7303メートルのピークだけが印されていて、西峰（本峰）がこれに当るのかどうか明確ではない。又、7380メートルの本峰も、正確に測量された高度ではなく、謎の多い山であっただけに、登路を求める事も困難であった。ベースキャンプの位置すら想定する事ができず、整えるべき装備を何を基準として考えればよいのか、問題の多い遠征行であった。サルトロ山群を南面から攻撃する事は、地形的に不利である点は、サルトロ・カンリ、K12等のピークについても言える事で、我々が西稜を早くから放棄したのも、P36氷河側へ出れば、雪のついた斜面が必ずあるのではないかと考えられたため、東稜を最有力候補と見たからである。結果的には、登路を見出し得ず、不運に終わったわけであるが、地形的に見れば、この推測は正しかったと言える。東稜の最低コルへ出る、シェルピ・ラの

水原のカールは、傾斜はきついが、雪の斜面が存在した。又東峰への登頂ルートは、東峰（東北峰が正しい）南稜に求めれば、十分な装備と日数をもって登頂の可能性が大きいと言える。先の雪の斜面は、雪崩のため近づけなかった事が、本峰放棄の理由であった。

シェルピ・カンリ本峰へのルートは、西稜と、東北峰を南稜から越えて行く二つが可能である。

1. 東稜（吊尾根ルート）

東北峰（7303メートル）南稜台地を第4キャンプとし、東北峰頂上近くに第5キャンプを作り、吊尾根の最低コル（6700メートル程度）に第6キャンプを置けば、本峰へのアタックは可能であるが、7000メートル峰を二つ登る事に成り、実現の可能性は極めて薄い。シェルピ・ラ水原のカールから吊尾根に出るルートは、前述の通り、雪崩が高い確率で全ての斜面を落下する。高差も1000メートルあり、中間キャンプ（第4キャンプ）が必要であろう点を考えると、極めて危険である。

2. 西稜ルート

本峰登頂に最も有利な尾根である。第一次隊の第二キャンプから、ジャングルム一峰と本峰南稜間の小さな支水河をルートに取り、西稜と南稜、ジャングルムに囲まれた小さなプラトーへ第三キャンプ（約5900メートル）を設営し、ここを前進基地として、十分補給を行なった後、西稜の側壁のできるだけ西寄りにルートを求めれば、高差300メートルほどで西稜上へ出る事ができる。ここからは、小さな雪のコブを一つ登ったあたりに第4キャンプ（6300～6400メートル）を建設し、上部の最も傾斜のきつい部分にある三つの岩壁のルート工作に当れる。この西稜上の岩壁は、下から順に大きくなり、最後のものは、相当手強いであろう。この岩壁を登り切ったあたりが7000メートル程でここからは傾斜が落ち、東北峰からの吊尾根が合する。頂稜は鋸歯状の岩稜からナイフシジとなり、頂上手前には牙と呼んでいるロックピナクルがあり、頂上へ続く。第5キャンプを岩壁基部の雪田に置き頂上アタックをかける事となる。

以上、各尾根について、試登と偵察の結果から得た登頂ルートの可能性について述べたが、第一次隊の結論として、以下の理由から西稜を登頂ルートとして推す次第である。

第一に、前進基地となる第三キャンプ予定のジャングルムのプラトーまで、さしたる困難もなく到達できる点があげられる。シェルピ・ラへの第4アイスフォールは、危険かつルート工作に多くの機材を必要とする。第二に客観的危険性は、岩壁部と頂稜部にある岩稜部にあるが、雪崩の危険性は少く、困難な部分の距離が短い点である。第三に、比較的高所までハイポーターを使用できる。十二分に第三キャンプを整備しておけば、じっくり西稜のルート工作に専念できるので、高度な技術力が要求されるであろうが、登頂できるものと思う。（井上記）

「カラコルム遠征を顧て」

地形すら定かでない。未知なる地域、そこにある未登の山だからこそ、登頂したかった。振り返れば、神戸大学山岳会、山岳部の南米へ、アラスカ遠征と、過去の輝やかなしい伝統を背にして、今回わが山岳会、山岳部では初めて挑む7000m級の山。だからこそ征服したかった。しかしシェルピカンリは、そう簡単に我々の足元には屈してはくれなかった。それでいいのかも知れぬ。4年前から多くの心の中であたためてきた山が、一発でそのペールを剥がされてしまったのでは、山と対話し、自己批判する時期さえも逃がしてしまう。又一方、我々の実力より、山が大きかったと言い逃れもするが、結局は敗北だった。しかしこの敗北から立ち上がってこそ、本当の山登りが出来るものと信じている。また敗北だと言っても少しも敗北感はない。それは自分達は精いっぱいやったという充実感に支えられているからである。確かに頂上には立てなかったけれど、このシェルピ登頂へ向けての過程は大事にし、成功だったとも自負している。

明確な地図もなく、一枚の写真があるだけの山で、原則論からいえば、3~4名の偵察隊を送り、次に登頂すべく本隊を送りこむのがオーソドックスな方法であろうが、今回8名の隊員を送りこんだ。これも結果、失敗ではなかった。3~4名の隊では、今回のような、登路の解明、地域の地図作成、高所医学の実験というような成果は持ち帰れなかったであろう。だが思ひに、この数年、夢かなうべく研究会等で、地域研究等は精力的に進めてきたが、パキスタン政府の許可が5月、出発6月、その間の出発準備に追われ、トランスポートの問題、食糧、装備等の問題、タクティクスの問題と、種々研究課題を多く未解決のまま出発したことには、残念に思うところがある。それに加え、隊長たるもの優れた指導性、各隊員の思想を掌握した上での論理性、及び、統力が要求される。それを充分に発揮し得たかということ。これは自ずから反省すべきことである。隊員はどうかといえば、各隊員は自分の本分をよくわきまえ、各パートで努力し、隊員構成、人の組み合わせもうまい、各隊員は悔いのない遠征だったに違いない。現役2名の隊員も、大学生として恥しくない隊員であった。各人が適材適所であった。だが適材適所とは、もうこれ以上、教育できぬ存在であるらしいが、まだ何んといっても、皆若い。それを優秀なる副隊長の存在で、カバーもされ、また、指示並びに教育してくれた。この成果は現地より現われ始め、これから大きく環をひろげ、表出してくるであろう。

タクティクス問題は、未知なるが故に、ルートは明らかでなく、BC建設にも多くの日数を費し、キャンプを進めるにも、どのルートをとればいいのかわからず、各パーティを送り、このルートが駄目なら、あのルートと消去法の戦術をとらざるを得なかった。アクリマティジエーションの問題も、ルート開拓、荷上げと、そのローテーションに起因している所がある。これらは、隊員の行動表を資料に検討しなければならぬと思いが、この問題は自己弁護できる側面が非常に大きいので、隊員のみならず、第三者を混じえて論じられるべきものと思う。ただ最も苦しんだのは、C_{III}建設後、C₄の一部、荷上げもすみ、東峰さえも断念しなければならぬ時であ

った。

以上、種々な問題点を残し、いろいろの反省及び批判もあると思うが、これらを各分野で詳細に研究し、これからの山岳会、山岳部の研究会等における研究素材として、より一層の我々の磨としたい。

さて次回、シェルピを登頂すべく遠征隊を送り出すか否かの問題である。それは、シェルピを神戸大学山岳会、山岳部の山とするか否かである。シェルピはすばらしい山であり、ぜひ登りたい山である。シェルピに遠征隊を送り、登頂したからどうというような社会的意義云々という議論もいろいろあろうし、またどんな登り方をするのかというような議論もあろう。だがせっかく手をつけた山である。それを他のカラコルムの山ならいいというのであれば、それでは長い伝統をも神戸大学山岳会、山岳部の名を辱しめることにはならないであろうか。いきたい者が先ずプロモーターになり、その核がふくれていって、遠征隊が出るというようなことでなく、プロモーターから計画案もが、遠征委員会に委任され、その委員会が遠征の企画運営を推進して、遠征隊を送り出すべきで、今回は一応そのような形で進められたが、次回からも、このような形で強力に進めていただきたいものと願う。来年、資金面で困難な面が予想されるが、たとえ個人負担のみでも、隊を送り、3次、4次とつなぎ、このシェルピを我々の山としたい。だから来年度、隊を送ることは、3次へのつなぎというように意味にも取られるが、このシェルピの許可を逃がさぬ上からも、また氷河経験者を一名でも多く養成する上からも、隊を送りだし、その後来たるべき実力内容充実した時に、シェルピ登頂は叶い、シェルピは神戸大学山岳会、山岳部の山として、名実共に誇れるものになるにちがいない。

最後に、今回の遠征実現は、皆様方の温かいご援助、ご指導の賜と、隊員一同深く感謝致しております。

(隊長 田中俊甫記)

会計報告

パキスタン政府より登山許可を得てから出発まで約2ヶ月しかなく、当初、全予算を約800万円とし、約300万円を大学・法人等に援助を依頼することとしました。しかし、物価上昇等の影響により装備・食糧・現地トランスポート費などの予算修正を余儀なくされ、全予算を約1,170万円、募金額を約450万円にあげねばなりませんでした。幸い大学・法人より予想以上の援助をたまり、無事遠征会計を締めくくることが出来ました。御援助下さいました関係各位に厚く御礼申し上げます。会計報告は以下の通りでございます。

(収入ノ部)		(支出ノ部)			
		邦貨払い	外貨払い	計	
隊員負担金	5,368,356	食糧費	305,009	528,190	833,199
法人寄付金	4,259,000	装備費	255,235	108,670	2,661,028
神戸大学山岳会募金	1,553,000	医療費	67,835	—	67,835
神戸大学援助金	2,500,000	渡航費	2,700,000	—	2,700,000
現物売却費	37,192	交通費	178,780	75,610	254,390
雑収入	267,874	宿泊費	28,400	198,597	226,997
合 計	11,735,422	トランスポート	1,098,754	914,972	2,013,726
		保険料	118,272	54,549	172,821
		記録費	847,320	—	847,320
		事務通信費	545,064	49,732	594,796
		人件費	—	911,145	911,145
		雑支出	452,165	—	452,165
		合 計			11,735,422

遠征援助の法人および個人 (アイウエオ順)

株式会社新井組	石原産業株式会社
有馬商店	出光興産株式会社
イカワスポーツ用品株式会社	伊藤忠商事株式会社
株式会社生駒時計店	エースコック株式会社
石井スポーツ株式会社	江崎グリコ株式会社

江崎グリコ米食株式会社
大阪医科大学
大阪合成樹脂株式会社
株式会社 大林組
尾西食品株式会社
株式会社 桂精機製作所
兼松江商株式会社
川崎重工業株式会社
関西電力株式会社
関西ペイント株式会社
寄神建設株式会社
久保田鉄工株式会社
クラブ雲峰
神戸材料株式会社
神戸新聞社
株式会社 神戸製網所
神戸大学
神戸山手女子短期大学
佐藤工業株式会社
サンコー・コンサルタント株式会社
サントリー 株式会社
塩野義製薬 株式会社
敷島紡績株式会社
株式会社 島津製作所
尚美堂 株式会社株式会社
株式会社 昭和設計
神東塗料 株式会社
住友ゴム工業株式会社
株式会社 星電社
千寿製薬株式会社
第一毛織株式会社
株式会社 ダイエー
大東タクシー 株式会社
大福機工株式会社
株式会社 大陽神戸銀行

大和紡績株式会社
宝塚化成株式会社
滝本株式会社
武田薬品工業株式会社
谷川計量器株式会社
薬理 株式会社
千代田火災海上保険 株式会社
東レ 株式会社
同和火災海上保険 大阪支局
凸版印刷 株式会社
有限会社 トモミツ縫工
トヨタ自動車工業 株式会社
内外硝子 株式会社
灘神戸生活協同組合
鳴尾東小学校
ニチャク 株式会社
日商岩井 株式会社
日清食品 株式会社
日東電気工業株式会社
日本アップジョン 株式会社
日本板硝子 株式会社
日本毛織 株式会社
日本ジフィー食品 株式会社
日本大使館 (在パキスタン)
日本ペイント 株式会社
日本ローブ 株式会社
野村証券 株式会社
野村貿易 株式会社
ハウス食品工業 株式会社
パキスタン航空大阪支所
株式会社 阪神コンサルタンツ
阪和興業 株式会社
備前レース 株式会社
日立化成 株式会社
日立造船 株式会社

株式会社 不二サッシ
不動建設 株式会社
松下電器産業株式会社
松下電工 株式会社
マルトー 株式会社
丸和紙器 株式会社
三菱重工業 株式会社
三ツ星ベルト 株式会社
都酸素

宮野医療器 株式会社
株式会社 昭和工務店
カ身鋳鋼 株式会社
株式会社 リンナイ
山本設計工務 株式会社
郵船航空サービス 株式会社
行本商会
ユニテカ 株式会社
吉田カメラ 株式会社

居 谷 滋 郎
牛 尾 邦 男
岡 崎 忠 忠
鈴 木 啓 介
頼 久 達 郎
長谷野 まり子
福 原 稔 郎
向 井 英 夫
吉 成 昌 郎

